

「真理とは何か」

ヨハネによる福音書一八章二八節～四〇節

南山教会 二〇二〇年四月五日

村山盛芳

大祭司はイエスをローマ総督官邸に訴えます。ピラトは彼らの所に出てきて、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と訊ねます（二九節）。ユダヤ人たちはイエスを、「ローマに対する反逆者」として告発しました。ピラトはユダヤ人たちの宗教上の争いで、イエスが捕らえられたことを知っていました。だから言います「お前たちの律法に従って裁け」（三一節）。ユダヤ人たちは反論します「私たちには死刑執行権がありません」（三一節）。やむなくピラトがイエスを裁くことになります。

ピラトがイエスに最初に聞いたのは、「お前はユダヤ人の王なのか」という問いでした（三三節）。イエスが「そうだ」と答えれば、彼はローマへの反逆者として有罪になります。この後も、ピラトがイエスに繰り返し尋ねるのは、「あなたはユダヤ人の王なのか」の一点だけでした。ピラトの問いに対して、イエスは逆に問われます「あなたは自分の考えでそう言うのか、それとも他の人の考えか」（三四節）。ピラトの考えであれば、彼はイエスをローマに反逆する地上の王と考えているわけであり、イエスはそうではないから、イエスの罪は否定されません。他方、ユダヤ人のという意味での「王」であれば、それは「メシヤ＝救い主」を意味し、イエスはそうですから、これを肯定されます。イエスはピラトに問い返されましたが、ピラトはそのような問題に関心はありません。ローマの行政官として彼の関心は、「イエスが

ローマに反逆しているかどうか」です。だからピラトは訊ねます「あなたは何をしたのか」(三五節)。

イエスにとって自分が神から遣わされた者であることを証しすることは大事なことでした。故にイエスは言われます「私は王である。しかし、私の国はこの世には属していない」(三六節)。イエスは地上の国の王ではありませんが、神の国の王です。神の国は見えないし、神の国はこの世のものでもない。しかし、この世に存在しています。私たちは、日本というこの世の国に属し、同時に神の国にも属しています。二つの国は秩序を異にしますから、私たちは日本を愛し、日本のために働きながら、同時に神の国を愛し、神の国のために働くことが出来ます。しかし、二つの国の原理が衝突する時があります。その時、私たちは神の国の住民として、地の国と戦います。今、イエスが置かれている状況がそうです。地の国の代理人であるローマ総督ピラトが、「あなたは王か」と聞けば、イエスは敢然として「私は王である」と答えられます。たとえ、その答えが死を招くとしても、イエスは「その通りだ」と答えます。ピラトは確認します「それでは王なのだな」(三七節)。イエスは答えられます「その通り、私は王である」。イエスは真理の国の王です。

イエスは語られます「私は真理について証をするために生まれ、そのために世に来た」(三七節)。イエスは父なる神から遣わされて世に来ました。そして、父なる神がどのような方であるかを語りました。イエスの言われる真理とは父なる神のことです。ローマは武力によってその帝国を拡大していきますが、イエスは真理(神)を証しすることを通して神の国を広げていかれます。ピラトには理解できません。故に彼は尋ねます「真理とは何か」(三八節)。ピラトは、「何が真理か」について関心があるわけではありません。彼の関心は、「誰が支配

者であり、誰が力を持っているか」です。彼はローマ総督として、目はローマを向いていません。従って、ここユダヤで本国の不興を買うような面倒を起こしたくない。地元のユダヤ人たちが怒らせるようなことは避けたい。他方、行政官として、彼はイエスが処罰すべき反逆者でないことはわかりました。だから、イエスを釈放しようとしています。ピラトはこの二つの欲求を調和させようと試み、ユダヤ人たちのところへ行き「イエスは無罪だ。釈放しよう」と提案します（三八節）。しかし、ユダヤ人たちは納得せず「イエスを死刑にしろ」と要求します。ピラトは正義よりも妥協を選び、ユダヤ人の要求するように、バラバを釈放し、イエスに死刑を宣告します。

ヨハネの記事では、イエスを死刑に追い込んだのは、ユダヤの祭司長たちであつたとされていますが、実際にイエスを処刑したのは、ローマ帝国です。ローマ帝国がイエスを、「社会の治安を乱す者」として処刑しました。ではユダヤの祭司長たちは「罪がないのか」、それもまた違います。祭司長たちは、「イエスを殺すことが神のためであり、神に仕えることである」と確信していたのです。パスカルはパンセの中で語ります「人間は宗教的信念をもつてするときほど、喜び勇んで、徹底的に悪を行うことはない」。ピラトは真理を知らず、関心も示しませんでした。彼は「真理とは何か」と聞きながら、その答えを聞こうともせず、部屋を出て行きます。ピラトはイエスが無罪であることを知っていましたが、ユダヤ人の圧力に負けて、正しい決断が出来ませんでした。ピラトはやがて皇帝に疎まれて失脚し、自殺したと伝承は伝えられます。真理を聞こうとしない者は滅びるのです。

真理こそ、国を造り、社会を造り、私たちの人生を完成させる力です。ローマは軍隊と法律によって、当時の世界を征服し、世界帝国を建設しました。しかし、外敵の侵入と内部の

墮落により、四〇〇年後に滅びました。キリスト教はイエスの死後、弟子たちが真理を証しする伝道を始め、やがて全世界に普及していきます。権力による征服は華々しいが一時的であり、真理による伝道は地味ですが、永続的です。イエスに勝ったかに見えたローマ帝国が、やがてイエスの弟子たちにより滅ぼされていきます。

現代の日本は、真理が覆い隠され、自由が抑圧される時代になりつつあります。森友、加計、桜を見る会等々の諸問題があやふやのままに幕引きされようとし、権力に逆らう人間は排斥される傾向が目立ちます。権力者の罪も、短期的には新型コロナウイルスの感染拡大に覆われて、「真理が明らかになる」可能性は少ないかもしれません。しかし真理はやがて明らかになります。

今日、多くの人々は、真理に関心を示しません。真理を知っても、収入が増えるわけではないし、出世できるわけではない。逆に真理を知ることによって、この世の悪が見えてきて、生きづらくなります。しかし、歴史が示しますことは、真理は最終的に勝つということです。真理のギリシャ語アレテアは、動詞形では「隠れていない」「明らかになる」という意味です。長い歴史の中では、真理を軽視したユダヤが滅び、ピラトが滅んでいきました。ガンジ―は語ります「あなたがすることのほとんどは無意味であるが、それでもしなくてはならない。そうしたことをするのは、世界を変えるためではなく、世界によって、自分を変えられないようにするためである」。世の風潮に流されずに、信念をもって事にあたれという意味でしょう。何週か前に学びました、「真理はあなたを自由にする」、大切にかみしめたい言葉です。